



医療環境が劣悪な  
アフリカ南部のザン  
ビアで、妊婦が安全  
に出産できる環境づ  
くりに取り組む。  
「適切に対処すれば  
助かるんですよ。救えるはずの命を  
救いたい」。朴訥な人柄の裏に、熱  
い思いを秘める。

舞台は、27の村からなる農業地帯  
のモンボシ地区。自宅分娩が主流  
で、専門知識がない家族らが救助す  
るため、出産前後に命を落とす母子  
が少なくないという。

国際協力機構（JICA）の委託  
を受け、昨年3月にTICOが建て  
た地区唯一の簡易診療所の近くに、  
今度は出産前の妊婦が待機できる宿  
泊所「お産を待つ家」を建てる計  
画。診療所には分娩室があるが、公  
共交通機関が未発達で遠くの妊婦が  
利用できないためだ。

保健ボランティアも養成し、住民  
たちの手で安全な分娩を地域に根付  
かせる。「施設を与えるだけでなく、  
自立を支援するのが肝心」と言う。  
その背景には、「与えるだけ」の  
支援が必ずしも有効ではない例をい

よしだ おさむ  
吉田 修さん

ザンビアで妊産婦の支援活動を  
始めた吉野川市のNPO法人・  
TICO代表理事

くつも見えてきたことがある。物置小  
屋になった診療所、壊れたまま放置  
された井戸…。「造るのは簡単。問  
題はそれをきちんと使ってもらえる  
ようにできるかだ」

徳島市生まれの医師。世界各地の  
途上国で医療支援に携わった。19  
93年にTICOの前身となる「徳  
島で国際協力を考える会」を結成。  
97年からスタッフを派遣し、ザンビ  
アを中心にさまざまな支援活動を展  
開している。

亡き父の古里・吉野川市山川町で  
99年に「さくら診療所」を開いた。  
地域医療と国際協力の両立を理念に  
掲げ、医師3人が交代で海外に出ら  
れる態勢を敷いている。

同町前川の自宅近くで、有機農業  
に汗を流す自称兼業農家。世界では  
10億人が飢えて苦しむ中、食料を大  
量に輸入しては飽食する日本へのア  
ンチテーゼでもあり、持続可能な生  
活の実践を提案している。

研修医の長男は県外在住。元県議  
の妻益子さん(51)と長女の3人暮らし。  
52歳。

